

青年の親イメージの変容プロセスとその要因

大 島 聖 美*

The changing process of young adults' images for their parents and this background

OSHIMA Kiyomi

abstract

The purpose of this study is to explore how young adults change their images for their parents and reasons behind these changes. Semi-structured interviews were conducted for 19 young adults. Data were qualitatively analyzed in a grounded theory approach. The results showed that there are two ways for young adults to change their images for their parents. One way is “improvements of images”, that improves young adults' images for their parents and rests their gaze on good involvement from their parents. Another way is “parents as human being”. This means that young adults come to see their parents as human being, and understand parents also have faults. The two ways are influenced by “Factors of changes” that involve “parents' balance”, “orientation to societies”, and “sympathy for their parents”. Through two way, young adults come to accept their parents and have “whole parents' images”.

Key words: young adults, parents, images of parents, accept, grounded theory approach

1 問題と目的

青年期の親子関係

かつて青年期は疾風怒濤の時期であるとされ、青年期の親子関係は緊張と葛藤に満ちたものとされてきたが、ここ数十年でその見解は大きく変化してきた（久世・平石，1992）。つまり、かつては青年期は心理的危機の時代であるとする青年期危機説が優勢であったが、その後心理的危機を経験しないですんなりと青年期課題を達成していく青年が少なからずいるということが明らかとなり、青年期平穏説が台頭し、危機説と平穏説の議論が提起された（遠藤，1995）。現代ではどちらが正しいというものではなく、危機と平穏を含めて多様な青年期が見られるとされている（下山，1998）。

そのような青年期に対する見解の変化とともに、青年期の親子関係のあり方に関する認識も変化してきた。青年期の重要な発達課題である「自立」に関しても、これまでは青年が心理的に親離れする側面が強調されることが多かったが、青年一両親間の愛着や親密性などの結びつきの側面も重要であり、結びつきがベースにある関係性のもとで青年の健康な心理的自立が促進されるという知見もある（平石，2006）。

Cooper, Grotevant, & Condon (1983) は個人化した (individuated) 青年の家族コミュニケーションの特徴は、「独自性」(individuality: 自分の意見をはっきり伝え、他者と自分の意見の違いを表明すること) と「結合性」(connectedness: 他者の意見に対して応答したり、敬意を払うこと) のバランスが上手く取れていること

キーワード：青年、親、親イメージ、受容、グラウンデッド・セオリー・アプローチ

*平成17年度生 人間発達科学専攻

だと述べている。Baumrind (1991) は親の養育態度を応答性 (responsiveness) と要求性 (demandingness) の二つの次元の高低によって①権威ある親 (authoritative parents)、②甘やかしの親 (permissive or nondirective parents)、③権威主義的な親 (authoritarian parents)、④放任的な親 (rejecting-neglecting or disengaged parents) の4つの類型に分類している。権威ある親の養育態度とは、要求性と応答性共に高く、子どもの行動に対して明白な基準を伝えて要求するが、侵襲的ではなく、罰よりも支持的なしつけ方略を用いるとされている。一方、甘やかしの親の養育態度は応答性は高いが要求性が低く、子どもに成熟した行動を求めず、対決を避けているとされている。反対に権威主義的な親の養育態度は要求性が高いが応答性が低く、説明なしに子どもが自分達に従うことを期待しているとされる。放任的な親は要求性と応答性どちらも低いタイプで、子どもの監視も支持もせず、子育てをほぼ拒否している態度とされている。そしてBaumrind (1991) はそれらの親の養育態度と青年の有能感や自律性、社会性、問題行動との関連を検討し、権威ある親の子どもが最も望ましい特徴を多く持つことを示している。

日本においても、辻岡・小高 (1994) が親子関係の類型に関わる情緒的支持、同一化、統制、自律性の4つの因子を抽出しており、これらの四つの因子は受容の因子と統制の因子の2つの二次因子に集約されており、Baumrind (1991) の要求性と応答性に類似した構造が見出されている。

親子関係の発達プロセス

青年期の大きな課題は「心理的自立」であり、独自性と結合性、応答性と要求性のバランスがそれを促進する親子関係の重要な特徴であることを上記で概観した。しかし、このようなバランスは青年期の初期と後期では異なるであろう。Blos (1962) によると、青年期前期では親からの分離が始まり、親との間に距離を取り始めたり、親に反抗したりするが、次第に親からの分離が進むと親を客観的に見れるようになり、青年期後期には親との対話がなされ、若い成人期とも呼ばれる後青年期では親との和解が発達課題の一つとされている。White, Speisman, & Cotos (1983) は、青年期から初期成人期までの両親 (主に母親) との関係の発達プロセスを大きく六つの段階に分けている。①まず初めは青年が親から分離した自己を強調し、自分は正しく先進的で、親は間違っていて、遅れているとみなす。②次に青年は親子関係において自分が何らかの寄与をしていると気づき、③親の立場に立って物事を見ることができるようになり、④両親が自分達を個人としてどのように見ているかわかるようになり、親側も子どもがアドバイスやケアができ、自分自身の意見を持っていることを理解できるようになる。⑤親子共々お互いを個人として認識し、仲間のような相互性を示すが、まだ表面的な段階から、⑥完全に仲間のような相互性を示す段階に至るとされている。そして22～26歳の青年にインタビュー調査を行ったところ、年齢が高くなるほど、親子関係の段階も進むことを示している。

日本においても類似した結果が見出されている。落合・佐藤 (1996) の中学生から大学院生までを対象にした心理的離乳に関する質問紙調査では、親子関係が①親が子を抱え込む関係及び親が子と手を切る関係、②親が子を危険から守る関係、③子が困ったときには親が支援する関係、④子が親から信頼・承認されている関係、⑤親が子を頼りにする関係の5段階の過程を経ることを示唆している。

以上のように、これまでの先行研究によると、青年期の親子関係の発達プロセスは最終的に親との和解や仲間のようにお互いを信頼している関係へと至ることが指摘されている。しかし、和解に至るまでの青年の親に対する認識の変化の背景要因については明らかにされていない。もしこの背景要因が明らかにされれば、それぞれの親子関係の発達プロセスで躓いている青年の理解に役立ち、そのような青年の発達を促進するための示唆が得られると考えられる。そこで本研究では、そのような背景要因に注目しつつ、後青年期に突入した青年が親子関係を捉えなおすプロセスとその背景要因を明らかにすることを目的とする。

またこれまでの研究では、親子関係としつつも、母子関係を中心に扱われることが多かったが、本研究では、20代の青年の立場から親子関係を振り返ってもらうことにより、父親及び母親からの印象的な関わりを明らかにすると同時に、父親と母親の役割の違いについても注目する。この点に注目することにより、青年期の子どもを持つ父親及び母親の果たしている役割に関する知見を得たいと考えている。

2 方法

質的研究法を用いる理由

本研究は20代の青年がこれまでの親子関係をどのように振り返り、親に対する現在の認識に至るまでのプロセスや要因を読み解いていくために、個々の青年に焦点を当てることで、彼らの内的変化の実際を捉えようとするものである。親子関係に関する認識プロセスは個人によって異なり、極めて複雑で多様なので、より現実に近づいて現象を捉えるには、多元的な視点を明らかにする必要がある。従って、青年の親子関係に対する認識という内面の変化を読み解いていくための方法として、解釈による意味の探索を重視する質的研究の立場をとる。

質的研究の中でも、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Glaser & Strauss, 1967) は、データに密着しつつ理論を生成する体系的なガイドラインを有しており、現象の持つ複雑さの記述に適し、理論や仮説の生成に有効である。グラウンデッド・セオリー・アプローチはデータの切片化を行い、それぞれにコードをつけカテゴリー化を試みる方法をとる。しかし Conrad (1990) や木下 (2003) によれば、グラウンデッド・セオリー・アプローチのデータの切片化は、研究対象の理解を限界づけてしまうことになるという批判もある。

そこで本研究では、データの切片化は行わずに、分析ワークシートを作成しながらデータに密着した概念生成を行う修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下 M-GTA) (木下, 2003) を用いて分析を行うことにした。主にヒューマンサービス領域で、得られた結果を現実に戻し、活用することができるのもこの方法を選択した理由である。今回得られた知見は、親との葛藤を抱えた人に対する支援や子育て支援などの領域で、具体的支援方法に関する示唆を得られると考える。

研究対象とデータ収集

本研究の対象者は、現在親との間に葛藤がなく、親とほどよい関係を保っている20代の独身青年19名 (男性10名、女性9名、20~29歳:平均年齢 24.3 ± 2.7 歳) である。従来の研究では「青年」として大学生が選ばれることが殆どだが、青年期の長期化 (大野, 2001; 下山, 1998) という指摘を踏まえ、本研究では下山 (1998) の定義に準じ、青年の範囲を「18~30歳」と考えた。調査時期は2008年6月~11月で、調査方法は1人あたり30分~70分の半構造化面接であった。面接の場所は調査対象者との合意により決定し、面接過程は対象者の許可を得てテープまたはICレコーダーに録音した。面接・テープ起こしは筆者自身が行った。

面接内容

面接は親子の過去の具体的エピソード、現在の親に対する認識とその変化について、下記のガイド項目に基づいて行った。面接中はこれらの項目をガイドとして用い、流れに応じて質問する順番や質問の内容は柔軟に変化させた。対象者の発言を受けて、適宜内容を膨らませた質問も行った。

ガイド項目: ①お父さん (お母さん) に感謝しているところ、もしくは尊敬しているところはどんなところですか。②お父さん (お母さん) にやってもらって、もしくは言われて嬉しかったことは何ですか。③自分が父親 (母親) になった時、これは見習いたいと思うことは何ですか。④反対にこれは見習いたくないと思うところはどんなところですか。⑤お父さん (お母さん) に大変な時や困った時に励まされたということはありませんか。⑥あなたが何か悪いことをした時、お父さん (お母さん) にはどのように叱られましたか。⑦お父さん (お母さん) と一緒に過ごして楽しかった思い出は何ですか。⑧思春期辺りには、お父さん (お母さん) に反抗したりしましたか。⑨お父さん (お母さん) への見方はどのように変化しましたか。

倫理的配慮

調査にあたっては、研究の主旨・質問に対する拒否の自由・データは研究目的でしか使用しないこと・引用する場合には個人を特定できないよう細心の注意を払うことを丁寧に説明し、対象者の了解を得た。

分析の手続き

データの分析は木下 (2003) に習い、以下の手順で行った。①データに密着した分析を進めるため、分析テー

マを設定し、その体験の主体を分析焦点者とする。本研究では分析テーマを「青年が親を肯定的に捉えるプロセス」とし、分析焦点者を「20代の独身青年」とした。②分析テーマと分析焦点者に照らして、データの関連箇所に注目し、それを一つの具体例として、概念名と定義と共に分析ワークシートに記入した。③他の部分や他のデータに類似例がないか検討し、随時分析ワークシートに追加した。概念を生成する際には同時にそれと関係しそうな概念の可能性も考えることで、相互の関連を検討した。④②と③の作業を繰り返しながらデータ分析を進め、具体例が豊富に出てこなければ、その概念は有効ではないと判断した。⑤さらに概念としての完成度を上げ、解釈が恣意的になるのを防ぐために、類似例のチェックと並行して、対極例の検討も行った。⑥次に、生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討した。⑦複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、結果図を作成した。

分析の最小単位である概念の生成過程の一例を示す。まず、対象者⑧が以下のように語った箇所に注目した。

「しばらく話して、御飯食べながら2,3時間話して、で最後には好きなようにやれやって、自分のやりたいことを認めてくれたというかですね、それかな。で、その時に最初は違うだろうって言って、父自身が子どもが言うことだからってはいはい聞くんじゃなくて、最初なんでそんなことやるんだって言って、父親の考えを示して、お前どう思うんだってちゃんとこう、もう18歳だからいいかげん理路整然と話すことはできる。そういう理屈だって考えることはできるんで、ちゃんと父の考えを述べて、でそれで僕が言って、そういう話合いをちゃんとやってくれたっていうんですかね、そういうところは良かったですね。逆にもうだめとか言うんじゃなくて、話し合ってくれたというのが、そういうことですね。なんだろう、自分が信頼されているというのが、実感できるので、それはすごい支えになりますね。たぶん空気みたいななんだろうけど、自分の中にすごい安心感があるというのは、どっかで認めてくれているという感覚があるからなんだと思いますね。」

また他の対象者の類似例としては、

「やっぱりやりたいという意欲があるということは大切なことだから、その気持ちに正直に今は行かしてあげたいと思うということは言うてくれましたね。」(⑩)、

「くりかえしになるんですけど、入試に落ちて一回留年したいんだけどって相談したときに一年くらいいいよっていう、すごくいってくれたことがうれしかったことですね。それは今の自分に大きく影響していて、人生の大きな機転となった言葉かなと思ってます。…(中略)…親の懐のかさにすごく感謝しています。」(⑪) などがあった。

以上のデータから、青年期後半になって自分の生き方について考えはじめ、自分のやりたいことが出てきた時に、親が最終的にそれを認めてくれることが、親から信頼されているという認識につながると解釈した。対象者⑩では、親が自分を認めてくれたことが、「人生の大きな転機となった」とも言っている。

このように分析焦点者にとってどのような意味があるのかを検討した結果、対象者⑧や⑪に代表されるデータから、自分の考えが尊重され、自立に向かう大きな第一歩となっていると考え、[親が自分の生き方ややりたいことなどを認めてくれること]を定義としてまとめ、「親が自分の考えを尊重」(概念名)という概念を生成した。

3 結果と考察

カテゴリー生成

概念を生成と同時に、概念相互の関係を検討し、複数の概念の関係からカテゴリーを生成した(Table 1 参照)。例えば、先ほどの“親が自分の考えを尊重”という概念が、主に自分の進路を決める時の重要な体験として語られていることに注目し、青年が自立した社会生活を意識した際に生まれてくると考えた。そして同じく社会や自立を意識した時に生まれる“周囲との比較”、“親の擬似体験”を加え、(社会への志向)と名づけた。

結果図の作成

以上の概念とカテゴリーの関係を分析結果として図示したものが結果図(Figure 1)である。理論的メモに記された別の概念との関連を参考に、分析テーマに照らした現象の関連性は矢印を用いて表した。例えば、「中学くらいまでは、本当に冴えない親父だと思っていたんですよ。何言ってるかよくわからないみたいな、本当

にうだつがあがらないというか、冴えない親父だと思ってたんですけど、もうすごいなと思いますよね。大学くらいからですかね、大学の3、4年くらいになって、いざ進路を決めるとか、そういう職業のこといろいろ考え

Table 1 カテゴリーと概念名

カテゴリー	サブカテゴリー	概念名	定義
イメージの改善	社会への道しるべ	納得のいく叱られ体験	叱られて当然だったと理由がはっきり分かる叱責体験。
		情報提供してくれた父	父親が社会に関する様々な知識を提供してくれたこと。
		頑張る親の姿	親が社会で、家庭で頑張っていて、それなりに上手く生きている姿を目の当たりにすること。
	基本的安心感	親と一緒に楽しい活動	子どもの頃、親と一緒に遊んだり、何か楽しいことに取り組んだりしたこと。
		面倒見てくれた母	母親が自分の身の回りのことをしてくれたこと。
		ほめられた体験	親にほめてもらってうれしかったこと。
一人の人間としての親	親も同じ人間という認識	親も自分と同じ一人の人間であると認識すること。	
	納得のいかない叱られ体験	親の怒りに任せて怒られたと感じ、怒られた理由が納得いかない叱責体験。	
	反面教師的関わり	親からの見習いたくないと思う関わり	
	親のマイナス面への気づき	(自分への関わり以外の場面で) 親の悪い面を目の当たりにすること。	
表裏一体の親イメージ	親の受容	親の悪い側面も仕方ないと受け入れること。	
	生き方のモデルとしての親	やっぱり親には尊敬できる場所があり、見習って生きたいと思うこと。	
	共に成長する親	親も自分も共に成長して、お互いに良い関係を築けていると感じること。	
変化の要因	父母バランス	父母バランスによる救われ感	片方の親による否定的影響をもう片方の親が緩和してくれたように感じ、救われた感じを受けること。
		片方の親による仲介	母親(父親)が、父親(母親)のいい面・悪い面などについて子どもに話し、それを聞くことによって、父親(母親)への理解が進むこと。
		仲よし父母の姿	父母が仲良く、気遣い合う姿を見聞きすること。
	社会への志向	周囲との比較	周囲の人から話を聞いたりすることにより、親への見方に関して影響を受けること。
		親の擬似体験	親の視点に立ち、親がやっていたことを自分がやる、もしくはやることを想像すること。
		親が自分の考えを尊重	親が子どもの生き方ややりたいこと(主に進路の面で)などを認めてくれること。
	親への共感	親の過去を知り共感	親の過去の体験について知り、親に共感する気持ち。
		親への反省の気持ち	自分も親に悪いことしたな、迷惑かけたなと思うこと。

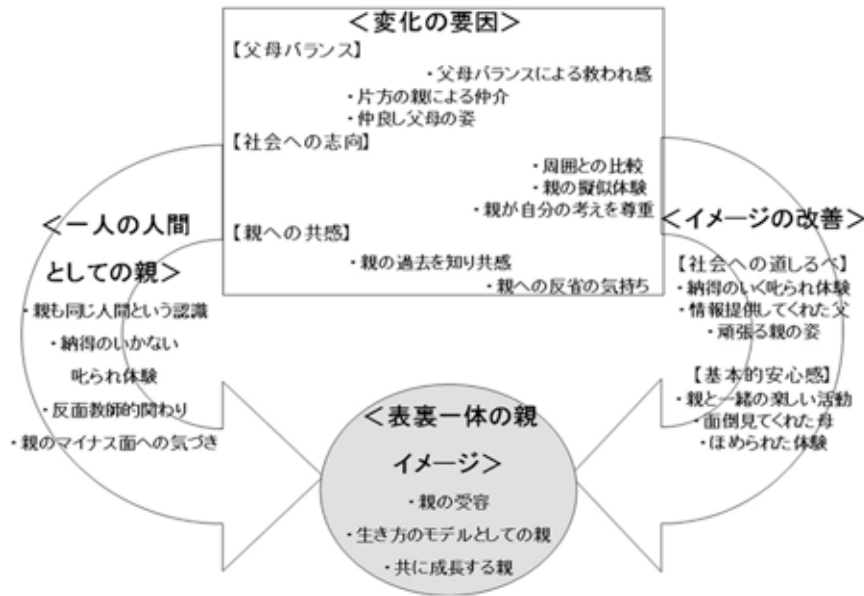


Figure1 青年の両親に対する認識プロセス

ると、やーすごいなーと思って、だって働いて家を建てるとか考えられないし（笑）、結婚するとか、すごい人だなと思って、本当何も知らないでそういう世界に飛び込んで、一からやって、本当に尊敬してますけど、すごい親父だなと思いますね。」(②)

というような、あまり良くなかった親イメージが改善されていくことを示す語りが数名に見られた。そこで「イメージの改善」を示す矢印を概念図に描き入れた。同時にこの概念に対する対極例を検討したところ、次の語りを発見した。「最初は親なんですね、親というか、一番近い他人とでもいいですかね。自分とは違う人だったんですね。でそれが、親だというのがわかってきて、しばらくして、中学生高校生になるにつれて、親も一人の人間だということにだんだん気がつきはじめるんです。欠点があったりするのに、いちいちなんでおまえそんなに短気なんだよと言ったりすることもあったんですけど、そういうのを通じて、親は一人の人間であって、一人の男であるということに気がつきはじめるんですよね。それで、そういうふうになんて一人の人間として見えるようになった変化は時間の経過とともにありましたね。自分の親から人間とそういうふうに変わりますね。」(⑧)

ここから、これまで自分とは遠い存在だった親に対して、欠点もある人間であるという認識の変化を示していると考え、「一人の人間としての親」という矢印を加えた。そして「イメージの改善」によって強調されてくる親の尊敬する側面として〈社会への道しるべ〉や〈基本的安心感〉カテゴリーが該当すると判断し、《イメージの改善》をカテゴリーの一つとした。同様に「一人の人間としての親」によって強調されてくる親の側面として“納得いかない叱られ体験”などの概念が該当すると判断し、《一人の人間としての親》をカテゴリーの一つとした。そしてそれら二つのカテゴリーに影響を与えるカテゴリーとして《変化の要因》カテゴリーを、二つのカテゴリーによってもたらせる帰結として《表裏一体の親イメージ》カテゴリーを生成し、結果図を作成した。

なお、M-GTAの手順に基づき、分析結果である「青年が親への認識を変化させていくプロセス」を概念とカテゴリーだけで簡潔に説明する、ストーリーラインを以下に示す。概念を“ ”、サブカテゴリーを〈 〉、カテゴリーを《 》で表している。

ストーリーライン

青年の親に対するイメージの変化には二つの方向性がある。まず一つが親の《イメージの改善》であり、それにより親からの“納得のいく叱られ体験”を両親がしてくれたことや、“情報提供してくれた父”、“頑張る親の姿”といった〈社会への道しるべ〉を提供してくれた親のイメージと、“親と一緒に楽しい活動”や“面倒見てくれた母”のこと、“ほめられた体験”という〈基本的安心感〉につながる親のイメージが促進される。もう一つは《一

人の人間としての親」というイメージの変化であり、それにより親からの“納得いかない叱られ体験”、親の“反面教師的関わり”、“親のマイナス面への気づき”という、親の完全ではなかった側面が強調される。この両方向からのイメージの変化により、次第に青年は“親を受容”し、“生き方のモデルとしての親”、“共に成長する親”を意識するようになり、青年の親イメージは〈表裏一体の親イメージ〉へと向かっていく。

このような親イメージの変化を促すものとして、《変化の要因》がある。〈父母バランス〉は両親の夫婦関係に関するもので、片方の親からの否定的影響をもう片方の親が緩和してくれたように感じる“父母バランスによる救われ感”により、両親への見方が良い方向に変化する。そして片方の親からもう片方の親の話の聞いたり、片方の親が自分ともう片方の親を繋いでくれるという“片方の親による仲介”や父母がお互いに助け合っている姿を見聞きする“仲良し父母の姿”により、親も間違ふことがあると思うと同時にその背景事情や、親の良い面を知ること、親に対する尊敬や感謝の念が促進される。〈社会への志向〉は青年が自立を考えた時に生まれるもので、“周囲との比較”によって、より親を客観視できるようになり、親の視点に立つて“親の擬似体験”をすることによって親の大変さを認識し、尊敬の思いを強めていく。さらに、これから自立していこうとする青年にとって“親が自分の考えを尊重”してくれることは、自分が親から大人として認められたという思いを促進し、親への感謝の気持ちへとつながっていく。〈親への共感〉は青年が自立を志向し、親の視点に立つという〈社会への志向〉の影響を受けるもので、“親の過去を知り共感”し、“親への反省の気持ち”を抱くことにより、親も自分と同じ人間という認識が深まると同時に、そういう人間にも関わらず頑張ってきた親に対して見習いたいという気持ちが生まれてくる。

以上のように、青年の親に対するイメージは様々な変化の要因により、親の否定的イメージが改善されて親の肯定的側面が強調されたり、一人の人間としての親という側面を含んだりしながら、《表裏一体の親イメージ》が大きくなっていく。対象者①はこの変化を以下のように語っている。

「母とおばあちゃんの関係はすごく悪くて、母は自分の母親から放任されて育って、ていう結構ぐちゃぐちゃな関係があって、こう、あまり持ち込まずに、持ち込んだ面も結構あったんですけど、母親がどういうものかというのをたぶん知らないで育ったんだけど、すごくその母親役割をがんばってしたんだなっていうのを最近尊敬してます。」

この《表裏一体の親イメージ》は、親の欠点などを受容すると共に、それでも親の良い点を見習っていきたいと思い、親と共に成長する同じ人間として捉えていることを指しているが、このような青年の親イメージが Josselson (1973) の言う「和解の段階」、Whiteら (1983) の言う「仲間のような相互性」、落合ら (1996) の言う「子が親から信頼・承認されている関係」や「親が子を頼りにする関係」につながっていくと考えられる。そしてこのイメージ変化のプロセスは親子関係が続く限り、絶えず繰り返されると考える。つまり様々な変化の要因によって両親についての理解が進むことにより、《イメージの改善》と《一人の人間としての親》に気づくプロセスが繰り返され、より立体的な親イメージが構築されていくと考える。

また、これまでは《一人の人間としての親》という側面、例えば“反面教師的関わり”のような親の関わりは良くないとされてきた。本研究でも対象者によってこのような関わりは良くないとされることが多かったが、そのような関わりがあるからこそ、イメージの改善もあると考えられる。例えば、対象者⑧は母親の見習いたい関わりについて

「まあやっぱり、しつけが母親厳しかったんで、もう直接的？そうきちんとしたマナーを与えるという意味では自分もやりたいなと。自分にマナーが身についているかはわかんないですけど、一応その姿勢はあったんで、それは守りたいな。」

と語る一方で、見習いたくない関わりについては、

「母親の場合もっと直接的に厳しかったんで、若干やっぱりそれが自分を神経質にさせたなっていうのがあると思うんですよ。そこがやっぱりあんまりやりすぎると良くないよということですかね。」

とも語っている。“反面教師的関わり”は確かに望ましくはないが、それは親が人間である限り、持ち合わせている部分であり、それによって青年は親イメージをより深く、全体的なものにしていくと考えられる。

一方、《イメージの改善》によって青年が目にするこれまでの親の関わりとして〈社会への道しるべ〉と

〈基本的安心感〉の提供が出現していた。これらはそれぞれCooper (1983) らの「独自性」と「結合性」やBaumrind (1991) の「要求性」と「応答性」と関連すると考えられ、青年の親子関係にとってこの両側面が重要であることが再確認された。また〈社会の道しるべ〉には“情報提供してくれた父”が、〈基本的安心感〉には“面倒みてくれた母”がそれぞれ含まれており、青年に社会の道しるべを提供することが多いのは父親であり、基本的な安心感を提供することが多いのは母親であるという、これまでの研究結果と一致している (Parsons & Bales, 1956)。

そして、このような《一人の人間としての親》への気づきと《イメージの改善》を促し、《表裏一体の親イメージ》へ至らせる要因として、大きく分けて〈父母バランス〉と〈社会への志向〉、〈親への共感〉が見出された。〈父母バランス〉は、例えば以下のように《変化の要因》として語られていた。

「母親はそれみて、親父も長男なんですけど、すごく親に、親ってのは僕のおじいちゃんおばあちゃんですけど、甘やかされて育ってきたからそうなんだよって何回か言われたことがありますね。すごく納得したというか。なるほどーって思いましたね。そう理解できたことでちょっと前にもそういう行動を、許せるっていうと大げさですけど、親父も人の子なんだなっていうすごくお父さんっていう意識しかなかったんですけど、そういう自分と同じなんだなっていう共感できる部分もちょっとあって、ちょっと安心したというか、そういう気持ちにはなりました。」(17)

両親の夫婦関係が青年の様々な側面に影響を与えることが指摘されている (e.g. 宇都宮, 2004) が、本研究により父母が青年に対してお互いにバランスを取りながら良い関係を築いていることが、青年の否定的な親イメージを改善し、それが青年の様々な心理的側面に好ましい影響を与えるという道筋も考慮できる。たとえ片親の家庭の場合であっても、親戚や教師など身近な大人が父母のようにバランスを取ってくれたり、他の見方を示してくれることで、青年は救われ感を感じていく可能性も考えられる。

〈社会への志向〉はまさに青年期の特徴である「自立」と関連しており、自分の考えを親が尊重してくれたことに感謝しつつ社会へと歩みだす中で、社会の中に位置する親を意識し、やはり親はすごかったという尊敬の思いを抱く。例えば、対象者⑦は以下のように語っている。

「自分が大人の年齢に近づいてきて、で実際自分がその年齢が若干見える、自分が幼稚園、小学校だったりした時の親の年齢が見える年頃になってきた時に、どれだけそれで自分ができるのかなと思った時に、なかなか無理だなと思って、あーすごいなって思ったり、実際あと30年経って、毎日何かを吸収しようとしてるかなと思った時に、うーん難しいなと思ったり (笑)、やっぱりそういうことを考え出してからですかね。」

そして、〈社会への志向〉の影響を受けて、「やっぱり大変だったんだろうな」(14) という〈親への共感〉が促される。これらの《変化の要因》は、親の否定的なイメージを改善したり、一人の親としての側面を強調したりしながら、青年の親イメージをより現実的なものへと変換させ、それが程良い親子関係につながっていくと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では、青年の親イメージがどのように変化し、その変化の背景にある要因を探索するためにインタビュー調査を行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。その結果、青年の親イメージは様々な《変化の要因》によって親の《イメージの改善》が行われたり、親も自分と同じ人間であるという《一人の人間としての親》という見方が促されたりして、《表裏一体の親イメージ》が大きくなっていくプロセスが示唆された。この結果は、これまでの青年の親子関係の発達プロセス研究に対して、《変化の要因》という異なる視点を提供し、今後の理論構築に向けて一つの可能性を示唆できたと考える。

また《変化の要因》は、現在親との間に葛藤がある青年がこれからの親の受容に向けて歩み出す時の助けになると考えている。例えば、片方の親に対して葛藤がある場合には、もう片方の親が仲介をしてくれることが助けとなること、社会に目を向けることにより、親への理解が進むことなどが挙げられる。特に〈自分の認識の変化〉は、自分自身の変化を促すカウンセリング場面において有効と思われる。“親の過去を知り共感”し、“親への反省の気持ち”を持つことは、より親に歩み寄ることにつながり、和解や受容への道に至りやすくなる。実際“親への反省の気持ち”は、心理療法の一つである内観療法における①お世話になったこと、②して返したこと、③

迷惑をかけたことの③と類似している。さらに《変化の要因》はあらゆる人間関係における和解や相手の受容プロセスに応用できる可能性があると思われる。しかしこの点については更なる研究が必要である。

《イメージの改善》や《変化の要因》に含まれる概念は、青年期の子どもを持つ親が子どもを支援する際にも有益であると予想される。例えば、青年がこれからの自分の職業など社会のことを意識し出した時に、親が真剣にそれに向き合い、青年の意見に耳を傾ければ、青年は“親が自分の考えを尊重”してくれたと感じやすくなり、今後の親子関係や青年の精神的健康に好ましい影響を与えられよう。

一方、本研究の対象者は現在親と良い関係を築いており、過去においても大きな葛藤を経験していなかった。まずはこのような「健康な」人達の現状を知ることが有用であるが、その結果が過去に親との間に大きな葛藤があった人、親から虐待を受けたような人々にも当てはまるかについては疑問が残る。今後はこの点についても考慮していきたい。

文献

- Baumrind, D. 1991 Parenting styles and adolescent development. In R. M. Lerner, A. C. Petersen, & J. Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of Adolescence*, vol. II, Garland Publishing.
- Blos, P. 1962 *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. Free Press. 野沢英司 (訳) 1971 青年期の精神医学 誠信書房
- Conrad, P. 1990 Qualitative research on chronic illness: A commentary on method and conceptual development. *Social Science of Medicine*, 30, 1257-1263.
- Cooper, C. R., Grotevant, H. D., & Condon, S. M. 1983 Individuality and connectedness in the family as a context for adolescent identity formation and role-taking skill. In H. D. Grotevant & C. R. Cooper (Eds.), *Adolescent development in the family*. *New Direction for Child Development*, 22, Jossey-Bass, 43-59.
- 遠藤利彦 1995 性的成熟とアイデンティティの模索 無藤隆・久保ゆかり・遠藤利彦 (編) 発達心理学 岩波書店
- Glaser, B. G. & Strauss, A. L. 1967 *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*, Aldine Publishing Company. 後藤隆・大出春江・水野節男 (訳) 1996 データ対話型理論の発見 新曜社
- 平石賢二 2006 青年期の親子関係の特徴 白井利明 (編) よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房
- 久世敏雄・平石賢二 1992 青年期の親子関係研究の展望 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科, 39, 77-88.
- Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of youth and adolescence*, 2, 3-52.
- 木下康仁 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い 弘文堂
- 大野祥子 2001 青年期の長期化と親への依存 柏木恵子・伊藤美奈子 (編) 女性のライフデザインの心理① 大日本図書
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳 教育心理学研究, 44, 11-22.
- Parsons, T. & Bales, R. F. 1956 *Family, socialization and interaction process*. Routledge & K. Paul. 橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明 (訳) 1981 家族 黎明書房
- 下山晴彦 1998 第7章青年期の発達 下山晴彦 (編) 教育心理学Ⅱ—発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会
- 辻岡美延・小高恵 1994 小・中・高校生における親子関係の認知構造の発達 関西大学社会学部紀要, 26, 65-84.
- 宇都宮博 2004 両親の夫婦関係に関する認知が子どもの自己肯定に及ぼす影響—女子青年の場合— 健康心理学研究, 17, 1-10.
- White, K. M., Speisman, J. C. & Costos, D. 1983 Young adults and their parents: Individuation to mutuality. In H. D. Grotevant & C. R. Cooper (Eds.), *Adolescent development in the family*. *New Direction for Child Development*, 22, Jossey-Bass, 61-76.